

たがたお祝いを申しあげた時の返事にくださったものらしかった。そして先生独特の藤原定家を思はせるやうながつちりした筆蹟で、「弓張月上巻のみやつとできました。このあと、岩波四冊、朝日の太平記五冊、有精堂の兩月物語評解一冊を四・五年の間に片附けねばならなくなり、困却しています。」と記され、短い文章の中にも先生のお仕事への意欲を窺うことができた。この中で記しておられる岩波の四冊(弓張月下巻・太平記三冊)はすでに世に出、朝日新聞社の日本古典全書太平記も一冊をお出しになられた。晩年の先生は実に矢つぎ早やに著書を出され、これらのお仕事の完成に心血を注いでおられたやうにお見受けする。それにしても、まだまだなぞつていただきたいお仕事があまにも多かつた。未刊の右に記したお仕事(太平記(以下、兩月物語評解)は勿論のこと、高山樗牛の滝口入道の注釈もまともにおられたやうであるし(「洛味」復刊第三集所収『滝口入道統説』、先生の学位論文と承る兩月物語に関する御研究も、是非出していただきたいものである。頼原退蔵博士や池田龜鑑博士のお仕事)がその歿後、知友、門人の方々の手を経て

数々出版されたやうに、先生のお遺しになつた多くの優れたお仕事は、できるかぎり後の者が整理して世に出すやうに努めねばならぬと思ふ。これはひとり先生の遺業を讃えることにとどまらず、学界のためにも益するところが甚だ大きいと思うのである。

先生を偲ぶことどもは尽きない。しかし思ひばかり馳せて、筆の方は一向に進まない。これというのも、わたくしの心のどこかに先生を失つたさみしさが、よほどこたえていたためであらうか。(三八・六・二三)
(昭和三十三年七月大学院卒、相愛女子短期大学講師)

誠実謙虚な先生をしのびて

金子 清明

文科に学部が出来て五年目、まだ法文学部といった頃——昭和十九年に入学して初めて私どもは後藤先生の声咳に接した。温厚真摯な先生の講義を時には間だるっこいような氣持で、今から思うと不遜な恥しい考えをもつた事もあつたが、いつどんな場合でも少しも

変らない先生の温情と、自信に満ちた熱意のある講義に対して、レジスタンスを事とするような学生もすっかり心服してしまった。当時戦況の悪化から敗戦へ、そして戦後処理と万事につけて条件の不備な中で学習であつたが、先生は暖房設備もない停電がちな教室で、学生が一人二人しかいないような場合でもいささかの緩みもない態度で講義を続けられた。全国的な食糧事情の悪化欠乏と厳しい食品統制の世相にあつて実直な人ほど栄養失調の著しい頃であつた。先生のお小さい体格が一層細々としていてよく講義に耐えられると思うほどであつた。しかし休講の事は稀であり、先生の欠講は何か余程の場合であると皆が危惧する有様であつた。そして先生と話し合つて寒い冬の期間など、学校の向い側にある先生のお宅へ伺つて心安く家族的な雰囲氣の中で講義を受けるような事もあつた。

深い造詣をお持ちの先生に我々は思う事を遠慮なくお話できる間柄となり、先生はいつにもこやかに親身に應對して下さつた。講義の中では「六代勝事記」や「滝口入道」など印象深いものであつた。「滝口入道」は中学の頃から何べんか読返してきた好きな小説で

あった。斎藤時頼も横笛もホントに好きだった。この作品を愛読していた頃に心引かれる横笛らしき人が暇に宿って離れなかった。文庫本の表紙裏に「滝口入道」の感動とそれにつながる懐かしい人の事を書き記しておいた。先生がこの本をご覧になって「珍らしい文庫本ですね」とおっしゃって、乞われるままにお貸ししてしまつた。異本研究の資料にでもなさるのお考えであらうと察して素直にお渡ししたものの今でもあの表紙裏の事を思うと面を伏せたい思いである。先生もキツト苦笑なさつた事であろう。もしあの本が少しでも先生のお役に立ち、お棺の中にも納められて先生のお伴をしていったとしたら自分が持っているよりはどれ程価値ある役目を果した事かと嬉しく思う事である。

先生の考証は微細に亘つて誠実であり学界でもその蘊蓄は定評があつた。そして立命館にあつては我々が国文科について語る時には常に誇り得る恩師であつた。しかし先生は御自分の専門に属する事であつても至極穏やかに控え目にお話されるのであつた。御存知ない事は実に卒直に「知らない」とおっしゃる。学者には自分の関連する学問についてこ

の言葉はなかなか言いにくいのではなからうか。曲りなりにでも活券の維持に努める場合が多い。もしそれを言う場合には何らかの意図か反撥的な含みのある場合が多い。先生の場合は何の構えも銜いもなく、学者としての良心の発露としてこの言葉を発せられるとしか受けとれなかつた。元の同僚でいま広島大学に転じた〇君という京大出の論客が「『知らない』なんて学者の言いにくい言葉の後藤先生ほど潔く卒直に言われる人はいないですよ。僕らのような若い者にでも丁寧な言葉遣いで話されるし、頭の下る人格者ですね。学者には稀な方です。」としみじみと述懐していたことがあつた。

学者を自認する者は一般に尊大である。もちろん例外はある。先生はそうした意味からは例外中の例外であると申し上げる方ではなかつたであろうか。大学は教育の一環として考えられる。教育は師弟の間に人間的な溝があつては効果を期し難い。尊大である事は何らかの差別意識か威勢の表示であり、時には虚勢でさえある場合がある。先生は眞の学者であると共に秀れた教育者でもあつたと信ずる。立命館は惜しい方を手放して他の大学に

取られたものである。当時優遇の道を怠つたのではないだろうか。そして今また学界は惜しい先生を永遠に失つた事を痛恨するものである。追憶を新たにして敬仰一人の思いである。(昭和二十二年九月卒、京都府立朱雀高等学校)

後藤丹治先生の思い出

滝 典 通

御停年にまだ間のあられるはずの後藤先生がおなくなりになられたと承わつた時、私の記憶に即座によりみがえつたのは、終戦前後の先生のお姿であつた。物質が欠乏して、都会の人達がすべて、生きんが為に食糧の調達などで東奔西走していた頃とはいへ、ひたすら学問の研究に専念していられた先生にとつて生活の御苦労はなみたいていではないように拝察された。一部の学生の中から何とか御援助申さねばという声もあつたが、われわれ自身も食ひかねる当時の状態では、どうにも致し方がなかつた。その頃、先生は過勞のため、御講義の帰りに階段で倒れられて、暫く病床につかれたりもなさつたと記憶している。